Ⅳ 経済に関する文章

4-1　マルクス主義の利と害

1965年8月21日、村上聖書研究会主催、宝田一蔵[1]記念講演会において語りしもの

マルクスの流れを汲む共産主義にもよい点と悪い点がある。これに対立する資本主義[2]にもよい点と悪い点がある。マルクス主義者はマルクス主義の悪い点をも善いと主張し、資本主義のよい点をも悪いといって攻撃する。資本主義者はマルクス主義のよい点をも悪いと攻撃するのでマルクス主義者は資本主義は誤っていると考え、いつまでも議論が平行線の上をたどって居って一致しない。真実を求めるのが論争の目的ではなく、自己の主張に同意屈服させるのが目的である。人間が皆真実を求め、何がより善いかということを真剣に考えるなら人間の社会に無用な争いがなくなり、どんなに世界がよくなるかと思う。

私の村に共産党の方がいる。私がかつて「君達は世の中をよくしようとしているのだから、自分の為の金もうけを主としている人々より私共に近い」といったら大変喜んでおった。平和運動を一緒にやろうと申して来たので私はそれは断るとはっきりいった。「共産党が唯物論、無神論だから拒否するのではない。現在の共産党は武力革命ということを重要な理論として高く掲げている。根本において戦争を認めておって平和運動をするのは偽りである。共産党が真に平和主義になり武力革命を否定するなら共に平和運動もするが、現在の共産党とは平和運動を共にすることは出来ない」といった。その共産党の方は真面目なかたであったからよくわかってくれて「共産党もよくなりつつある」と言った。それで「君のような人が内部から共産党をよくするように努めて欲しい」と言っておいた。真実をもって話し合えばよく理解し合う事が出来る。

マルクス主義のよい点を考えて見よう。社会現象を科学的に分析して多くの尊い真理を見出した。新しい経済学が打ち建てられた。事実をよく見ることが大切であることを強くいっている。事実をよく見て事実に即して考えなければいけないという。これが科学的方法である。新しい学問によって新しい理想が掲げられた。その理想実現の為には大きな犠牲を払っても勇敢に邁進した。マルクス主義のことを書いたものに「自分のことよりも人類のことを考え、世の中から働く人間の貧乏をしめ出すために身を捧げた人間たちは皆といっていい程自分は貧乏なままで死んだ」とある。彼等は貧乏をもいとわないで貧乏をなくす為にその一生を捧げた。多くのマルクス主義者が獄に投ぜられる[3]ことをも辞さないでその主義を守り通した。これらのことが多くの人を感動せしめ、共産主義が多くの理論的欠陥があるにも拘らず多くの真面目な人々を共産主義に引き入れた。

これは基督教でいう献身であり殉教である。殉教ということは基督教によって

始まったもので、マルクスは基督教の一番よいものをとり入れたのである。人を感激させるということは大きなことである。特に今日は感激することが少ないので重要である。

マルクス主義の悪い点の第一は暴力を認めている事である。共産主義はよいものを多く持っているにも拘わらず世界の半分から嫌われているのは暴力を用いる為である。嫌う人の側にも欠陥があるが、共産主義の方に嫌われる原因のあることは否定出来ない。終戦直後日本でよく用いられた火炎ビンが共産主義の為にどの位マイナスになったかわからない。今はそれを悟って火炎ビンは使わなくなったが、武力革命の理論は捨てることが出来ないでいる。先入観に捉われて真理に達することが出来ないでいるのである。そうはいっても武力も必要ではないか、武力革命によって陰惨な帝政ロシアが倒れて人民の幸福の為の新しい国家が出来たではないかという人があるかも知れない。しかし帝政ロシアはすっかり腐っておって武力革命がなくとも倒れる寸前にあったのである。1905 年 6 月 14 日に黒海[4]のオデーサ[5]でロシアの戦艦ポチョムキン号で反乱[6]が起こった。これをマルクス主義者は武力革命の必要の証拠としているが、私にいわせればこれこそ帝政ロシアが腐っておって武力革命なしで倒れんとしていた証拠である。武力革命によらない方が早く福祉国家が完成したと思われる。暴力がどれ程共産社会実現を遅らせているかわからない。スターリン時代のロシアは帝政時代にも優って陰惨なものであった。この世界から貧乏をなくそうというよいものであるのに人々から嫌われ恐れられ、そして共産主義を武力をもって弾圧する口実を与えているのは残念である。道徳はすべて人為的[7]なものであるからと言って否定し、共産主義達成に役立つものが善であり、阻害するものが悪であると考え、暴力も共産主義達成に役立つから善であるとしているのであろうが、却って暴力が共産主義社会の実現を妨げている。道徳はそう簡単に人為的であるといって否定出来ないのである。道徳を否定したものは何らかの形でその報いを受けている。

真理を暴力で曲げる事は出来ないし、また真理を護るに暴力を必要としない。キリスト教が始まった頃当時の権力者がこれを弾圧しようとした時にガマリエルという学者が起こって「あの人たちから手を引いて、なすままにしておきなさい。その企てやしわざが人間から出たものなら自滅するだろう。しかしもし神から出たものならあの人たちを滅ぼすことは出来ない」といったと聖書にある[8]。真理ならば人間の力で滅ぼすことが出来ないといっているのである。そしてキリスト教は真理であるから、ローマ帝国の大きな国家権力をもってしてもこれを滅ぼすことが出来ないで、ついに三百年たってローマ帝国の方が降参してキリスト教を認めるようになった。

この点においてアメリカの考えも間違っている。共産主義の侵略を武力をもって防ごうとするのは愚かである。ベトナムで共産主義が浸透しようとしているのは共産党の武力の為というよりはベトナムの政府が腐っている為である。援助すればする程政

府が腐って行くので共産主義助長になっている。暴力によらなければ理想が達成出来ないというのは、それが真理であるという信念が足りないといわなければならない。中世のヨーロッパの大学の話に、論理学には種々な論法が、例えば三段論法というものがあるが、その中にこん棒論法というのがあったとのことである。それは議論で負けた時に帰路を先廻りしておいて相手をこん棒でなぐって降参させるというのである。暴力をもって護るのは、自分の誤りを表白(9)することである。自分の考えが真理であるならば何物をもってしてもつぶすことは出来ないという自信を持つことが出来る筈である。

マルクス主義の最大の欠点は、その唯物論、無神論である。19 世紀の科学万能思想に捉われ、また社会現象に施した科学的方法の成果に眩惑されて唯物論に陥り、唯物論が科学的であるとの錯覚に陥ったのである。私は物理学を勉強したものであり、マルクス主義者よりは少しは自然科学を知っていると思うが、彼等は物理学も数学もよく知らないように見える。マルクス主義者は今までの形式論理学は駄目で唯物弁証法でなければならないという。形式論理によると、亀が兎に一歩でも先んじていると永久に兎は亀に追い付くことが出来ないという誤りを正すことが出来ないから、唯物弁証法でなければいけないという。その論法は B.C.450 年頃のエレアのゼノンのいい出した論法で、ゼノンはアキレスと亀とで述べている。アキレスが亀の今いる所に着くといくら少しでも亀は前に出る、その亀のいる所にアキレスが着く時は亀は少しでも前に出る、それでいくらたってもアキレスは亀の所に追い付くことは出来ないというのである。これは大変巧妙な議論であって、これの誤りを知るのには数学の助けを必要とする。近頃は高校でも無限級数を習うが、ある規則に従って次第に小さくなる量を無限に加える場合に、即ち無限級数が常に発散して無限大になるとは限らずに、小さくなるなりかたによっては有限の価に収斂することもある。例えば 1、½、¼、⅛というように半分ずつ小さくなって行くものを無限に加えると 2 になる。「いくらたっても」といっても無限大になるとは限らないである有限な時間内では追いつけないといっているに過ぎないのを、永久に追いつけないとすり換えてごまかしているのである。数学をよく知らないといったのはこの事である。数学を知っていれば、これまでの論理でも唯物弁証法でなくってもちゃんと誤っていることが証明出来るのである。

無限級数の研究は数学の重要な部分であって、円周率の π 等の超越数は無限級数に展開して計算しなければならない。π とか e とかただそういうものだと教えられておったものを、無限級数に展開することを習って自分でも計算出来るとわかった時には大変嬉しかったことを憶えている。

事実をよく見ることがよい点だといったが、その事実をよく見ることが不充分である。数学を知らないということも事実をよく見ないことである。経済学者が数学者で

ある必要はないが、知らない数学を使って推論してはならない。有名な唯物史観というのも歴史を充分よく見ないからであって、歴史をよく見れば神の在し給うことがよくわかる。私は独立学園の卒業生の進学の時に、理科方面に進みなさいとよくいう。事実をよく見、科学的判断力を養い信仰を持つに役立つからである。しかし理科に向かない人もあるのでそういう人には歴史をやりなさいと勧める。長い時代、広い地域に亘って見ると、弱くとも正しいものが勝ち、強くとも悪しきものが滅びることがわかる。経済的理由の他に道徳的事由によって世界が動いている事がわかる。ドイツの詩人シラー[10]の言に「世界歴史は世界審判なり」というのがあるとおりである。

唯物論者のよく掲げる例はアメリカの南北戦争である。普通奴隷解放の為の聖戦といわれているがそうではなく、全く経済的事情の為に起こったというのである。南部では奴隷を使わなければやって行けない経済組織であり、北部は奴隷を使わない方がよい経済的状態であり、その経済的状態の違いの為に起こった戦争であるといって、その経済的事情の研究を詳しくしてその理論の証明をしている。確かにそういう経済的事情の差違があり、それも戦争の一つの原因にはなっているが、それだけではなく他にも道徳的、精神的原因があった。例えばストー夫人[11]がアンクル・トムの小屋[12]という奴隷制度の悪を主題とした小説を書き、これが非常に多くの人に読まれた。またロイド・ギャリソン[13]という人がリベレーターという雑誌を 1831 年、彼の 27 歳の時より 1865 年 12 月 29 日まで 35 年間刊行して、時の政権、金権に逆らい、奴隷制度を攻撃した。ローウェル[14]が彼の生涯を讃える詩を作っているが、その中に「勇気と印刷機械とあり」という言がある。唯物史観を変更しなくとも、せめてストー夫人やギャリソンが精神面で奴隷解放運動をしたのであるが、これが効果がなかったということを証明するならよいが、こういう事実は無視している。マルクスは宗教を大きな社会現象としてこれをよく研究し、宗教は阿片なりという結論を下した。しかしこれも事実をよく見ていない結果である。マルクスが研究の対象としたのは、キリスト教の抜けがらである信仰のなくなったキリスト教会である。マルクスは霊的なキリスト教の信仰はわからない。信仰のない僧侶が貴族と結んで庶民を苦しめた社会現象しか見ないで阿片だといった。真理なる、霊的なる信仰をマルクスは知らなかった。三枝博音[15]という人が「理想」という雑誌 300 号(1958 年（昭和 33 年）5 月)に唯物論史という題で日本の唯物論者の系譜を書いている。その中に内村先生を入れていて内村鑑三は唯物論者ではないが唯物論的であるから入れるといっている。内村先生の信仰に在来の宗教と異なったものを認めているのである。マルクスが内村先生の信仰を知っていたならその経済学は少し異なったものになったろう。キリスト教はもともと内村先生の信じた如きものであって、キリストも「神は霊であるから礼拝をする者も霊と真とをもって礼拝すべきである」と仰っている。形式や儀式のないものである。真理であるからこれを護るに教会というような組織を必要としない。原始キリ

スト教はこういうものであり、これをローマ帝国の強大な国家権力をもって迫害してもつぶれなかった。それがローマ帝国の保護を受けるようになると世俗的利益が伴うようになり、堕落して世俗的になってしまった。マルクスはこの堕落した、世俗的になってしまったキリスト教に惑わされて純粋のキリスト教を見ることが出来なかった。しかし事実を見ようとする熱情がもっと強かったなら、たとえ内村先生以前であっても霊的な信仰を知ることが出来た筈である。

マルクス主義者は事実をよく見ようという熱意がない。唯物論が科学的であると簡単に決めてかかっているが、決して科学的ではない。科学的ということはもっとよく事実を見ることである。自分の説に都合のよい事実だけを取り上げるということは最も非科学的である。ただ単に取り扱う対象が同じ物質世界であるというので唯物論を科学的と思うのは早まった考えである。如何に取り扱うかということが大切である。事実をよく見ること、事実を重んじ、真理を重んずることが大切である。偏見や先入観に捉われないで真理を、真実を求める事が大切である。真理の示すことに従順にならなければならない。結論を先に決めてしまってはならない。ある主張、主義、学説があってそれを弁護する為に学問を使うことは学問に対する冒涜である。学問が反対のことを示すならこれに従わなければならない。真理の前に跪くのである。

唯物論の及ぼす害は人間を利己的にし、金銭万能主義にすることである。福沢諭吉[16]は真に偉い人である。あれだけの新知識を持って明治政府に入ればいくらでも出世出来たのであるが、自分は幕臣[17]である、明治政府の禄は食まない[18]といって役人にならず、慶応義塾という学校を作って終生野[19]にあった。それ程気骨のあった人である。明治文化に貢献した功績は大きい。しかし内村先生はその功績のみを考えてその害を忘れてはならないといっている。福沢の思想は富国強兵であって、国民が金を儲けて国全体が富めば国が強くなり栄えるというのである。慶応義塾では経済学の研究に重点をおき、出身者の多くが経済界で活躍した。日本国を物質的に富ませるのには役立ったが、日本人を卑しくした。金儲けへの良心的満足を与えたので、実業家が平気で金儲けを主とするようになり、拝金宗[20]をはやらせるようになったのである。人は神と富とに兼ね仕えることは出来ない[21]とある。金儲けに一生懸命になると精神がおろそかになる。企業がすべて金もうけ主義になってしまった。

同じことがマルクス主義についてもいえる。唯物論の結果人が物だけに頼るようになる。マルクスは唯物論に毒されないで物質以上のものを求め、世の中から貧乏をなくそうという理想達成の為に物質を顧みなかった。貧乏さえも辞さなかった。しかしマルクスの精神は少数の人にしか伝わらないで、大部分の人はその理論の結果に動かされて物にだけ頼り物質主義になってしまった。物質の象徴である金銭に頼るということになり、金銭万能主義になってしまい、遂に金銭の奴隷になってしまっている。50 年近く前、私が旧制の高等学校の学生だった時にある先生が「大工は家を建

てるのが職業で、その仕事をやって行くことが出来る為に賃金を取る。学校の先生は教えるのが職業でそれをやって行くことが出来る為に俸給[22]を受ける。ところが不思議な職業があるもので、商人は金をうけるのが仕事である」といって不思議がっていた。大阪の商人は昔は「もうかりまっか」という言を挨拶にしていた。今日は 50 年前には不思議な職業であった金儲け業が商人だけでなくあらゆる職業に見られるようになってしまった。学校の先生も給料が目的でそれを得るために教育の仕事をする。大工も賃金さえ得られればよい。じきに壊れるような家でも建てる。入学難[23]ということが言われているがこれも有名な大学に入ればよい就職口が得られて出世が早くお金が儲かるからである。どんな職業でもよい、給料さえ沢山くれればよいという風になってしまった。40 年前にはそうではなかった。私がまだ大学に勤めて居った頃、その頃は物理学などやっても金儲けにならなかった。けれどぼつぼつ世間で科学の重要性を認めて来て、ある新聞社で物理学科の卒業生を非常に有利な条件で採用したいといって来た。そしてある学生が条件の善い為にそれに応ずることになってほとんど確定したが、その学生はそれを断った。新聞社へ入ると一生物理はやれなくなると考えたからである。当時は金よりも仕事をと考えていた人が沢山居った。しかし今はすべて金である。金銭の奴隷である。現代人は金銭の奴隷ではない。幸福になる為に金銭が必要だから求めるのだというかも知れない。しかし果たして金銭を得て幸福になっているだろうか。いくら得てもなお欲しいとあくせくし、不平不満の中にいるのが実状ではないか。マルクスは高い目的の為に、貧乏という人間苦を取り除く為に物質的なるものを犠牲にして、気高い生涯を生きたが、一般の人はマルクスの唯物論の為に一層物質的、金銭万能的になってしまって、不平不満の中にくらしている。労働組合でも賃金闘争を主としてやっている。賃金は上がっても物価もまた上がって苦しさは変わらない。人を物質的に金銭万能的にするのがマルクス主義の最大の害であると思う。今日多くの人が金銭万能的になった原因の一つがマルクスの唯物思想であることは否定出来ない。

マルクスが世の中から貧乏をなくす為に自分の貧乏をも辞さなかったということは、マルクスの崇高な精神を表す言としてしばしば人が口にすることであるが、実はこれがマルクスの最大の欠陥であると思う。世の中には貧乏をなくすことより大切な事がある。現に自分の貧乏をなくそうとしないで他の人の為につくすという崇高な事をマルクスが為した。人をその崇高なことに導くことでなくて、いいかえれば自分が一番よいと考えていることでなくて、二番目の貧乏をなくすということで人の為につくすという所にマルクスの善さの限界がある。使徒のペトロやヨハネは自分の持っている一番よいものを人々に与えた。ペトロやヨハネは無学な凡人、漁師であったが自分の持っている一番よいものを与えたので世界を動かすような大きなことを為した。二千年後の今日でも世界を動かしつつある。マルクスは最も教養を積んだ人であ

るが、そして世界に大きなものを与えたが、それが自分の持っている一番よいものではなく二番目、三番目のものであるからペトロやヨハネ程の力はない。マルクスの力は今後 100 年か 200 年で衰(おとろ)えて行く。一番大切な事は貧乏をなくす事ではなく、貧乏に打ち勝つ力を与える事である。そして信仰によって、ロマ書で伝えている如(ごと)き信仰によって、すべての人にこの力が与えられるのである。マルクスのような偉い人でなくとも、ペトロやヨハネの如(ごと)き無学な凡人(ぼんじん)がマルクス以上の偉い事を為(な)し得るようになるのである。これが信仰の偉大なる点である。

(「独立時報」[24]第 51 号、1965 年)

4-2　経済と道徳

1970年7月28日、生保内(25)聖書勉強会において語りしもの

新約聖書「テモテへの第一の手紙」の６章９節を読みます。

> 富むことを願い求める者は、誘惑と、わなとに陥り、また、人を滅びと破壊とに沈ませる、無分別な恐ろしいさまざまの情欲に陥るのである。金銭を愛することは、すべての悪の根である。ある人々は欲ばって金銭を求めたため、信仰から迷い出て、多くの苦痛をもって自分自身を刺しとおした。（テモテ第一の手紙６章９節～ 10 節）

いま、世の中が非常に悪くなっております。このことは誰でも言っていることでありますけれども、その一番のもとは、みんな金銭を愛することばかりやるようになってしまったということです。それで今のような世の中になってきた。で、「金銭を愛することはすべての悪の根である」、悪のもとである、とありますが、ほんとうにそのとおりであります。その金銭を愛すること、あるいは、金銭のことというのは、経済の問題でありますが、経済と道徳、ということを今晩すこし考えてみたいと思います。

今日の経済学の一番のもとといいますのは、18 世紀の終わりごろ活動した人で、アダム・スミスという人がつくったと言われております。アダム・スミスが「国富論」と日本語では普通言っておりますけれど、「国の富の理論」、正確にいいますと「国の富の本質についての研究」、という非常に有名な本を書いたのでありまして、それが経済学のもとだというふうに言われております。で、そのアダム・スミスが、wealth of nations というのですけれども、それにおきまして、どういうことを言ってるかといいますと、一口に言いますと、人間の経済活動というものは、各人の利己心にまかせておけばいいのだ。みんなが利己的に働いてやってゆくと、いろいろなことが調節されてうまくいく、とそういうふうなことを言っておるのであります。

しかし、アダム・スミスという人は、非常に信仰の深い方でありまして、信仰についての本もたくさん書いておる人であります。アダム・スミスが人間の経済活動というものは、各人の利己心にまかせておけばいいのだ、というふうに言いました裏には信仰があるのでありまして、不都合なところは神さまがちゃんといいように正してやって下さるから、それで利己心によって経済活動がなされてもかまわないということを言っておるのであります。ところが、そのアダム・スミスのもっておったところの信仰はだんだん忘れられて、彼が言いました、経済活動は利己心によってやってい

いのだ、ということだけが残ってきておるわけであります。そして、ついには唯物的になってしまい信仰を忘れてしまって、ただ利己的に働けばよい、お金をもうければよいというふうになってしまいました。金もうけ主義になってしまったわけであります。その金もうけ主義、金銭を愛することがすべての悪のもとであると先ほど聖書の言葉で読みましたが、そのために今日、いろいろな困ったことが起こってきて、日本中の人が、あるいは世界中の人が苦しんでおるわけであります。

それがなおひどくなりまして、マルクス主義の経済学がうちたてられました。そして、それが非常にえらい学問のように思われております。しかしマルクス主義の経済学の基礎というのは、唯物論なのです。人間は道徳をもっているものであって、人間の生活から道徳ということは離すべからざるものであります。しかし、道徳を持っている人間ということを考えて経済学の研究をいたしますと、非常にめんどくさくてほとんどできない。だから経済学を研究するときは、道徳ということを無視してきたわけであります。そして、その結果を人間の世界にあてはめて実行いたしますというと、人間の世界は道徳なしではやっていけない世界でありますから、それで経済学がうまくいかないのであります。

学問の世界では、ある仮定を設けて、そして研究をすすめるということをいたします。けれども、あくまでも仮定をもうけて研究したんだということを忘れないで、研究した結果が適用されるのは、そういう仮定が成り立つ場合だけであるということを忘れないのであります。けれども、経済学の場合にはそうしたことを忘れてしまって、すべて道徳などということは考えないでもよい。精神的なもの、そういうものはなくて、唯物的なのだから、だからみんなが金もうけさえしていればいいのだというふうになってしまった。それで人間の社会がだんだんと悪くなってくるのであります。

そしてそのまちがいが、経済の発展とともに一層明らかにされてまいります。マルクス主義の学問によりますと、資本主義の世界というのは、熟柿が熟して木から落ちるように倒れてしまって、そして共産主義の世界になるということを言っておるのでありますけれども、しかし資本主義の世界も倒れないでおりますし、共産主義の世界もなかなかよくならないでおります。これは資本主義が悪いとか、共産主義が良いとか、そういう問題ではありません。神より離れたから、そういうふうに悪くなったのであって、資本主義でも神に従って信仰をもってやれば、はじめアダム・スミスが言ったように、自分がもうけるために働いてもうまくいくのであります。けれども、神を忘れて、信仰を離れてやると資本主義でも共産主義でもうまくいかないのであります。資本主義が悪い、共産主義が悪いというのではなくて、神より離れることが悪いのであります。道徳を離れること、道徳を忘れて自分勝手なことをするから悪いのであります。

今日の経済が非常に悪いということは、多くの人が気がついていることであります。

今日の日本、日本ばかりでなく世界で一番大きな問題は、公害の問題であります。ただもうけさえすればいいとして、そのためにいろいろな悪いガスが出て空気を汚したり、悪い水がでて川を汚しても、そんなことはかまわない、もうけさえすればよいということでもって、空気が汚れ、川が汚れ、いろんな害がでて困ってきておるのであります。ことに日本の経済というのは、その公害ということを無視して起こった経済なのです。欧米の経済は、もうけ主義になっておりますけれども、でもまだ公害のことをかまわないでやってはいけないのだというような考えが少しでも残っております。けれども、日本では特にそれがないので、それでよけい日本が経済成長にともなうところの公害問題で悩むというところにきてしまったのであります。

日本の経済は初めから公害ということは考えないで、公害無視の上になりたってきております。日本において公害問題が起こったそもそもの始めは、足尾銅山の鉱毒事件[26]です。1897 年（明治 30 年）頃からそういうことが問題になりました。足尾銅山は古河という財閥が経営している鉱山でありますが、その銅の鉱毒が渡良瀬川という川に入って、そしてその沿岸の農民が非常に苦しんだことがありました。そのために田中正造という人が、一度は衆議院議員になりましたけれども、そのひとが言論に訴え、いろいろ運動をいたしまして、鉱毒問題を解決しようといたしました。しかし、その頃もすでにそうでありましたが、政府というのは経済界と結びついておりますから、なかなかその鉱毒を政府が取り除くことをしませんでした。それでこれが大変な政治問題、社会問題になったわけであります。しかしそれもなんとか言論の力やいろんな人が苦労したおかけで解決できたのでありますけれども、今日はそれにもまさる公害がたくさん起こってきております。そのことは日常私達が知ってることであります。

日本は非常に経済成長が早い、高度の経済成長をなしとげたと言っておりますけれども、それは公害のことなどちっともかまわないでやったから、それでこんなふうにえらい経済成長が起こったのです。政治家や経済界の人たちは経済成長が大きいといって自慢しておりますけれども、これは実は自慢にならないことであります。

たとえば、日本では鉄鋼の生産が世界第一位とか第二位とかいっておりますけれども、それはどうしてこういうことになったかといいますと、まず、鉄を鉱石から溶鉱炉でもって溶かして銑鉄[27]という鋳物[28]にする鉄を作ります、そしてその鉄にいろいろな操作をいたしましてはがね[29]にし、これを鉄として使うようになるんでありますが、この鉄を作るのに一番必要なものは熱でありまして、燃料であります。いったん銑鉄を溶鉱炉で作り、それをさましてまたあたためてはがねにするというのでは、非常にお金がかかります。それで溶鉱炉から出たまだ熱い銑鉄をすぐそのまま、鋼鉄にする、はがねにするということをやりますと、非常に経済的になるわけであります。そこでその方法をいろいろと研究するわけです。この方法に具合のいい転炉[30]を使

う製鋼法があります。この方法を使いますと、溶鉱炉からでた銑鉄をすぐにはがねにするので大変具合よくいきますものですから、非常に経済的なのです。しかし日本でそれをやっても欧米ではそれをやらなかったのです。それをやると一日に何べんも鋼鉄を作る炉をひっくりかえします。そしてそのとき、非常にすすだのそういうものがたくさん出てみんなが困ります。だから、それは経済的にはよい方法だけれども、そのために近くの人が迷惑するから、だから、そういうものはやらないとしておったのです。けれども、日本ではそれをやったのですね。やったものだから、日本の製鉄業は非常に大きくなりました。どんどん大きな溶鉱炉を作るようになりまして、高い何十階建てというビルティングにも相当するような高炉[31]を作っても、たくさんできた銑鉄はどんどんはがねにすることができる。それで、非常に日本の鋼鉄の生産がふえたわけです。日本では公害なんて起こってもかまわないんだ、ただ、もうかりさえすればいいということだから、そういうことができたわけです。

その他いろんな有名な問題がたくさんあります。水俣病なども近くの住民の人達が苦しんでおりますんですけれども、会社では金を出そうとしない。その病気は自分たちの工場のせいではない、というふうに学者を買収して理屈をつけさせ、また、政府にはたらきかけて、工場の廃水[32]が川に流れ込むのを黙認するようにして来たのです。ですから、水俣病は、ずい分長い間に多くの人がそれにかかってしまい、非常に悲惨な状態をつくっております。カドミウムのためのイタイイタイ病[33]というのも同じことでありまして、お医者さんを買収して、鉱山で流す害のためじゃないということを言わせようとしたりいたしまして、ただ経済成長だけを考えてきたわけであります。あまりひどいとさすがに問題になって、近頃、水俣病でもイタイイタイ病でも、そういう害を起こすような経済じゃだめだとみんながいうようになりまして、なんとかその処置をするようになりました。けれども、それは出来るだけ最小限にして、そのために使う金は出来るだけ少なくし、よけいもうけようと、ということばかり考えているわけであります。こんなふうにしていけば、ほんとうに日本は住めなくなります。経済界もやはり亡びなくてはならないようになってしまいます。よく考えれば、こんなことをしておったら駄目になるとわかるはずですけれども、日本の財界の人たちは、目前の利益だけを求めて、公害などということには目をつぶろうとする、将来のことは考えまいとしてやっておるわけです。

そういうわけでありますので、この地球上が人間が住むことが出来ないような所になってきつつあるのであります。ある人は今後十年でもって地球上には生物は住めなくなる、人間が住めなくなるということを言った人があります。それは少し早い計算かも知れませんが、その計算というのは、BHC[34]がだんだんと海に流れていって蓄積されていくというものです。BHC というのはさしせまっての害はないのですが変化しないものなので、それが蓄積されると困るわけです。少しぐらい害があってもそれ

がすぐこわれてしまって害のないものになるのならばよいのですが、BHC は少しでは害は少なくてもいつまでたってもそれが変化しないでたまってしまうので、いまの割合で海に流れこんでいけば、十年で海に生物はいなくなるというのであります。海の生物に頼っておる人類は、食べ物がなくなって亡びるようになってしまうということを言ったのです。それは少し早すぎる見積りでありますけれども、しかし、ほとんど多くの人が 21 世紀にならないうちに、あるいは 21 世紀になったならば、ほんとうにこの地球上は人間が住めないようになるだろうということを言っておるのであります。BHC もそうでありますけれども、この地球がだめになってしまういろいろのことが考えられるのであります。

宇宙飛行士が地球を見て、実に美しいところだ、と言ったという有名な話がありますけれども、その地球が美しいところでなくなってしまう。そこで地球というものを考えてみますと、なにからなにまで実によくできております。昔は地球のようなものは宇宙ひろしといえども、他にたくさんないだろう、ほとんど他にないだろうと考えて、それくらい理想的なものだと考えておりました。しかし近頃の学問の研究によりますと、星というのは太陽のようなものでありますが、そのまわりに地球のような遊星がある、そういうものがたくさんあるだろうということになりました。昔は、太陽のようなものがどろどろにとけて、それがぐるぐるまわると、丁度雨に濡れたかさをぐるぐるまわしますと水が飛び散るように、地球のようなものが飛びだしたのだ、そして、地球からも月のようなものが飛びだしたのだ、それがぐるぐるまわっているのだといっておったのであります。それはずいぶんいい加減な想像を加えた説でありまして、どれくらいのやわらかさに溶けてどれくらいの速さでまわれば飛び出せるかと勘定してみますと、どうも飛び出すということはいえないのであります。ですから、丁度地球のような遊星のある太陽というのは、ほとんどないのじゃないかと言われておりました。ところが近頃はまた新しい学説がでてまいりました。そのような火の玉のようなものがまわって飛び出してできるのじゃなくて、宇宙に弥漫[35]している物体がだんだんちぢんでくる。そうすると、その中心の太陽のようなところは非常に熱くなって、このようになるのだ、それで、地球だとか金星だとか木星だとかいうような遊星は、ちぢんでいくときに取り残されたものが遊星になっているのだ、というのであります。そのほうは計算してみますとありうるとわかって、星はそういうふうにしてできたのだというふうになってきました。そうしますというと、太陽ぐらいの星のまわりに遊星のあるのがたくさんあって、その中には、地球のような条件のものが、いくつかあって、きっと生物がおるだろう、中には高等生物が、地球の人間よりも文化の進んだものがあるかもしれない。だから、そういうところに通信をしてみよう。電波が、どうも宇宙のわからないところからきているが、それは非常に高等な生物がおって、そして、地球の人間よりも進んでおって、非常に強い電波を出すことのでき

るものがあるから出すんじゃないのか、地球のほうからも電波を送ってやってみて、そして通信ができるようにならないか、ということを言って、五、六年前にアメリカで一番みこみのありそうなところに向かって電波を送るという実験をやっておりました。今でもやっているかもしれません。

そういうわけで、こういうことを多くの学者が考えておりますけれども、高等生物が住めるようになるということはいろんないい条件が重ならなくてはできないことであります。ちょうど地球ぐらいの大きさでないと困る、それからちょうど地球ぐらい太陽から離れていないと困る、というようなわけであります。それからまた、地球は自転ということをしています。地球は一日に一回りしているのでありますが、それが、もっとのろいというと、たとえば月は一ヶ月に一回りすることになっているものですから、太陽に向いているほうは非常に熱く、向いていないほうは非常に冷たくなっている、ということになります。そんなに熱くなったり冷たくなったりしたら生物は住むことができませんから、24 時間で一回りするぐらいの自転でなくてはなりません。いろいろなことを考えますと、それはたしかに遊星（ゆうせい）というものはどの星にもあるかも知れませんが、そういう条件を満たした、人間が住めるような遊星（ゆうせい）というものはほとんどないのじゃないか、ということが考えられるのであります。それで、そのあるかもしれないから電波で通信してみようと考えたひとは、百万に一つぐらいはそういうものがあるかも知れないからやってみようと考えたのです。でも私は百万に一つよりももっと少ないように思うのです。いろいろな条件を重ねますと、その確率はその条件の確率をかけあわせたものになりますから、非常に少なくなります。この、人間が今知っております宇宙で私達に近いところのものは銀河系といっております。天の河がその一番端（はし）になっており、それをわきのほうから見ますとうずまいているように見えますから渦状（かじょう）星雲ともいっております。そういう渦状（かじょう）星雲は 10 万光年位の大きさで、それに、大体、1000 億ぐらいの星がある。そういうような星雲が 150 万光年位離れて沢山（たくさん）あります。そういう星雲がまた 1000 億ぐらいあるのですから、1000 億かける 1000 億の星がこの宇宙にあるわけです。それでも人間のような高等生物の住めるようなものは一つあるかないかというものではないかと言われておるのです。どうもその電波でやってみようという人の勘定（かんじょう）は間違っているようです。

それぐらい地球というのはよくできておって、住みよくできているわけです。酸素がちょうどいいあんばいにある。それからまた、水が非常にたくさんある。海の面積が、陸の面積より大きいくらい水がたくさんある。そういうような星ができるだろうかと考えますと、なかなかできにくいと考えられまして、実に地球というものは人間が住むのに都合のいいようにできていると思うのであります。

それを人間が、もうけるだけの、経済活動でこわそうとしているわけです。高度成長といいますけれど、産業が非常に発達しますとエネルギーがたくさんいります。電

気だとか石炭だとか石油だとか、そういうものを使って産業をおこすのでありますけれども、その力のもと、エネルギーのもとは、物を燃やすことによって得ておるのであります。原子力がもっと使えるようになればそういうことはなくなりますが今のところ、ほとんど 99 パーセントまでは物を燃やして、石油でも石炭でも木でも燃やして、それから力を得ておるのでありますから、酸素がどんどん減っていきます。そして、地球の上では、動物が酸素を使って生きていく、呼吸をしています、そしてその反面、植物が酸素を出して、炭酸ガスを吸っておりますので、酸素が丁度いいあんばいの割合になっておるのです。しかし人間がどんどん物を燃やしていきますというと、酸素が足りなくなってバランスがくずれてくると言われております。それからまた、炭酸ガスが非常にふえてきますが、空気中の炭酸ガスの量がふえていくと日光を弱めるようになりまして、それもまた困ったことになります[36]。

このようなわけで、この調子で経済成長をやっていきますと、酸素がなくなるというだけでも人間が住めなくなる、ということになってくるかもしれません。それどころじゃない。公害でもって近ごろは光化学スモッグ[37]というようなことも言われるようになって、人間がもっと早く住めなくなりそうになってきております。そういうものをうまく防ぐといったところで、こんなに経済成長が早くなると、酸素の消耗量が多くなって、防ぐ前に生物が住めなくなるというふうになる心配がでてきておるわけであります。

地球上に、昔、非常に栄えたところの生物がいくつかあります。ことに有名なのは、非常に大きな爬虫類[38]であります。トカゲのような形で何十メートルというようなものがたくさん地球上で活躍しておりました。それは非常に体が大きくて力が強いというので、他の動物を倒してそして優位を占めたわけであります。ところがその生物がみな衰えてしまった。絶滅してしまった。なぜ絶滅したかというと、体が大きいことのために、力が強いことのために亡びてしまった。体が大きくて力が強いために食べる物がたくさんいる。すると、それがふえると食べる物がなくなってしまう、そして滅びてしまって化石となって骨が残っているだけになってしまったわけです[39]。

ですから、生物学のほうの原理[40]といたしまして、生物はその優位になった特徴でもって滅びる、ということがあります。昔のその巨大な爬虫類は、体が大きいことで優位になったのですが、体が大きいことのために滅びてしまったのです。なんでもその優位になった力でもって自分が滅びるようになってしまう、というのが生物学上の原理であります。

人間は、これまでのどんな生物よりも、非常な勢いで地球上にふえて優位を誇っているわけでありますけれども、人間がどうしてこんなにふえてすべてのものを支配するようになったかといえば、それは知恵の故であります。知恵をはたらかして、優位を占めるようになったわけであります。人間は力も弱いし、そういうことでは優位

になれないけれど、知恵をはたらかして、たとえば鉄砲を作って早く走る動物でもなんでも狩りをしてとることができるなど、そういうふうにして優位を占めたわけであります。ところがその知恵でもって人間が滅びるようになる。人間は知恵でもって文明を作りました。文明を作ったけれど、その文明のゆえに滅びる、というふうになるわけであります。文化が非常にすすんで、そして経済成長が激しくなると、その経済成長が激しくなったということのために、人間は滅びるようになってきているのでありまして、丁度、昔爬虫類が滅びたと同じ原理でもって、人間は知恵のために滅びる、文明のために滅びるというふうになりつつあるわけであります。

けれども、それは、人間を人間として考えないからそうなるわけです。人間を生物として動物として考えるから、そうなるわけであります。また事実、人間が動物となってしまっているというわけです。ですから、日本人のことを、外国人は、エコノミック・アニマルと、経済的動物だと、人間じゃなくて動物だといっておるそうであります。動物的にどんどん経済成長していくというわけであります。つまり、公害などということをかまわずに、ひとの迷惑などということをかまわずに、お金さえもうければいい、ということをやっている。だから、人間でなくって動物だというわけであります。人間が動物であるならば、やはり、他の動物と同じように、自分の一番の特徴のために滅びるということになります。そして確かにそういう兆候が今日の世相[41]をみるとあるわけであります。

しかし、人間はただの動物ではないのでありまして、人間は霊魂をもっております。霊魂をもっておる、人格をもっておる、そして神に似せてつくられたものでありますから、他の生物とは違う、動物とは違うのであります。そしてまた、それが非常に尊いものでありますから、キリストは、「人は、全世界をもうけても、自分の命を損したら、何の得があろうか」[42]と人間一人一人の命というものは、あるいは人間一人一人の霊魂というものは、全世界ともかけがえのないくらい尊いものであるということをおっしゃったのであります。事実そして、そのために、本当の意味の文化が進んだのでありまして、信仰のない日本でも、基本的人権ということをいって非常に人間を尊くいうのであります。最高裁判所の判決例の中にも、人の生命は全地球よりも重い、という言葉がありまして、それは、さきほどの、キリストのお言葉からきているのであります。

そういうふうに、人間は動物じゃないのだ、ただのものじゃない、霊魂をもっている、そこが人間の違うところであります。そして、霊魂をもった人間ならば、他の生物の場合はその特徴のゆえに、特技のゆえに滅びるのでありますけれども、滅びないですむのであります。

それはすなわち信仰によって、ふつうならば滅びるかもしれないけれども滅びないのであります。人間の世界には道徳があります。道徳があるということは、人間が霊魂

をもっているということであります。そしてキリスト教の信仰のないところでも道徳というものはあって、道徳は守らなくてはならないということが考えられておりました。そうしておれば人間は滅(ほろ)びないですむ。けれどもそれを忘れてしまって、道徳なんてかまわないで、霊魂(れいこん)なんてないんだ、唯物(ゆいぶつ)的なんだ、だから人間は、ただもうけさえすればいいのだ、ということを考えてしまうと、どうしても今日(こんにち)の日本においてその兆候(ちょうこう)がみられるようなふうに滅(ほろ)びなきゃならないのであります。

ですからどうしても、経済というものには道徳というものをおりこまなければだめです。人間の経済活動もできなくなります。アダム・スミスが、利己(りこ)心にまかしておいてもいいと言ったのは、決して道徳がいらないということを言ったのじゃなくて、人間の世界には道徳があるから、だから、そういうふうにまかしておいてもいいのだ、自然に調節されて良くなる、と言っておるのでありまして、その道徳を無視してしまえば、道徳のない世界となり、唯物(ゆいぶつ)論の世界になり、そうなれば、経済活動はやっていけなくなるのであります。経済と道徳は切り離すことのできない問題であります。そのことを、今日(こんにち)の状勢がよく私達に教えておってくれていると思うのです。

西洋の学者でも、経済と道徳を切り離してはいけないのだということを言う人が近頃になって出てまいりました。マックス・ウェーバー[43]という人が特にそういうことを言っております。日本では二宮金次郎(にのみやきんじろう)[44]が経済と道徳を結びつけた一番最初の人だと言ってもいいと思います。これはマックス・ウェーバーなどよりも早く経済と道徳を結びつけたのでありまして、偉いことだと思います。彼は道徳的な基礎がなければだめだということを言ったのでありますが、このことは日本の誇りと言ってもよいと思うのです。ところが日本は、明治以来、西洋の文明を取り入れて、しかも信仰をぬきにして文明を取り入れたものですから、だから、道徳を無視して経済活動が特にひどく行われるようになって、今日(こんにち)のような状態になってきてしまったのであります。

日本だけでなくて、世界中の国々がだんだん信仰を離れて、そして道徳を無視して、経済活動をするようになっておりますので、世界は滅(ほろ)びるということを感じさせられます。最近、またイギリスでは南ア[45]の、ケープタウンに武器を輸出するというようになってしまい、これまではいくらか道徳的な理由のゆえにもうかる仕事もおさえておったのですが、とうとうこんなことになってしまいました。道徳がだんだん忘れられていくということは、どうしても滅亡を早めることになると思うのですが、この世というものは、どうしてもある時期に滅亡してまたつくり変えられなければならない、そういうことを経済的なことが教えてくれています。

「ペテロの第二の手紙」というのが新約聖書のあとのほうにありますが、その３章８節は非常に科学的なことを言っておるところがあります。そこから読んでみますと、

愛する者たちよ。この一事を忘れてはならない。主にあっては、一日は千年のようであり、千年は一日のようである。

これは今日言っております相対性原理、アインシュタインという偉い物理学者が言いはじめた相対性原理というものを思わせるような言葉でありますが、

一日は千年のようであり、千年は一日のようである。ある人々がおそいと思っているように、主は約束の実行をおそくしておられるのではない。ただ、ひとりも滅びることがなく、すべての者が悔改めに至ることを望み、あなたがたに対して長く忍耐しておられるのである。
（ペテロ第二の手紙 3 章 8 節、9 節）

主というのはキリストでありまして、キリストがおいでになって、そして、新しい地、新しい天ができて、天国が実現するのであります。その時に最後の裁きということをする、ということを聖書が教えておりまして、そのことをあらわした絵が、ミケランジェロ[46]という一番偉い絵描きによって描かれ、ローマのヴァチカン[47]の中の、システィーナという礼拝堂[48]にあります。その礼拝堂の正面に描いてある非常に大きな絵、それが、最後の審判ということがあると聖書が教えておりまするこを絵にしたものであります。その時はいつかわかりません、思いのほか早くくるかも知れない、だから備えをしておかなければならない。その備えをするというのに、ある人は、いついつ来るから、だからもうその準備をする。それはまだ冬にならないうちにくるから綿入れ[49]なんていらないから綿入れを売ってしまってもいい、そんなことを考えます。それが備えだと思ったら、それは大きな間違いで、正しくなること、キリストの前に正しくなることが一番大事な準備であります。つまり、言い換えれば信仰をもつことであります。信仰をもって最後の審判に義とされる、正しいと審判を受けることが大事であります。その時のことを言っておるのであります。

しかし、主の日は盗人のように襲って来る。その日には、天は大音響をたてて消え去り、天体は焼けてくずれ、地とその上に造り出されたものも、みな焼きつくされるであろう。このように、これらはみなくずれ落ちていくものであるから、神の日の到来を熱心に待ち望んでいるあなたがたは、極力、きよく信心深い行いをしていなければならない。その日には、天は燃えくずれ、天体は焼けうせてしまう。しかし、わたしたちは、神の約束に従って、義の住む新しい天と新しい地とを待ち望んでいる。
（ペトロの第二の手紙 3 章 10 節～ 13 節）

人間が動物になってしまって、エコノミック・アニマルになってしまえば、滅(ほろ)びなければなりませんけれども、しかし、信仰によって立つ時に、滅亡から免(まぬか)れて、新しい天と新しい地を待ち望むことができるようになるわけです。信仰というのは、本当に道徳を行なおうとして初めてわかるところのものであります。ですから道徳を守ろうとする熱意をもってはじめて、新しい天地を待ち望めるのです。人間がほんとうに動物になってしまってはなりません。ただ金もうけだけをするようになってしまってはならないのであります。

道徳を守ろうとして一生懸命にならなければなりません。そうしなければ、ほんとうに今日(こんにち)の世相(せそう)が示すように、世界は滅(ほろ)びてしまいます。よく人は、今日(こんにち)のように荒れ狂った世の中では信仰というようなことは考えておられないといいますけれども、今日(こんにち)こそ、私どもは信仰のことを考えなければならない時であります。さきほど読んだ聖書の個所(かしょ)に信仰なしの世界がどういうふうになるかということがよく示されておるのであります。ここでは、天体が焼けくずれてしまって、地球が住めなくなるように書いておりますけれども、そんなふうにならないでも、今日(こんにち)の調子でもってどんどん石炭(せきたん)など、石油などを燃やして酸素がなくなるだけでも、焼けくずれてしまうと同じ状態になってしまうわけであります。どういう状態になってこの世が終わりになるか、そして新しい天、新しい地ができるかということはわかりませんけれども、だからそれをここで言っているように、焼けくずれるというふうにいってもいいでしょうし、どんな言い方をしても、そんなことが大事なのではなくて、道徳的でなくなれば、どうしても滅(ほろ)びるより他(ほか)仕方がないということが大事で、このことがよくわかるわけであります

ですから、私どもは本当に真剣に信仰のことを求めて、そしてその最後の審判に無罪とされるように、義(ぎ)とされるように、一生懸命にならなくてはなりません。その道はキリストの十字架を信じるより他にないのであります。どんなに一生懸命に正しくなろうとしても、人間の力では本当に正しくはなれないのです。人はすべて神の裁きを受けて、滅(ほろ)びなければならないのでありますが、キリストが代わりに私達のうける罰をみんな引きうけて下さったから、だから私達は許されるのだと、義(ぎ)とせられるのだと、最後の審判において義(ぎ)とされて救われるというのが、それが信仰でありますけれども、それを一口でいいますと、罪の赦(ゆる)しの十字架の福音(ふくいん)、であります。それより他に救われる道がないのであります。今こそ私ども本当に真剣に、信仰をもたなければならない、罪の赦(ゆる)しの十字架の福音(ふくいん)を信じなければならない時であると思います。

4-3　経済成長は神の刑罰

聖書は経済成長は神よりの刑罰であると教えている。イザヤ書 2 章 6 節～ 7 節に

あなたはあなたの民ヤコブの家を捨てられた。
これは彼らが東の国からの占師をもって満たし、
ペリシテ人のように占者となり、
外国人と同盟を結んだからである。
彼らの国には金銀が満ち、その財宝は限りない。
また彼らの国には馬が満ち、その戦車も限りない

とある。神が、ユダ国[50]を捨てられたから、ユダは繁栄したのだというのである。ウジヤ王の時に、ユダは非常な経済成長をなした。ダビデ[51]の時には及ばないが、領土も広くなった。東の国からの占い師とは占星術者をいう。占星術の英語は astrology である。astro は星で、logy は学問ということである。だからこれは立派な天文学を意味する。ところが学問を金儲けに用いて、星占いをし、堕落して占星術になり下がったのである。そして星をよく調べて名前をつけるという意味の astronomy が天文学を意味するようになった。今日の日本の学者が学問を曲げて、金儲けをして、経済成長させたのとよく似ている。

外国と同盟したというのも、正義を守るために同盟するのでなく、金儲けのために同盟するので、これも今日の日本の政府が金儲けのためにアメリカと同盟しているのとよく似ている。学問も政治も外交も金儲けのためになされる。その結果経済成長をし金銀が満ち、その財宝は限りなくなる。

経済成長をすると生産物を消費して貰わなければならないから浪費を奨励するようになり、最大の浪費である戦争をするようになる。日本でも四次防[52]と称して大軍備を持つようになった。

馬が戦争に使われるようになって戦争の様子が一変した。騎馬の集団とか軽量な戦車を二頭か四頭の馬に引かせて疾駆する武器は、今日でいえば原子力ロケットにも匹敵する発明であった。それ故馬が満ち、戦車が限りないとは大きな軍備を意味する。そしてユダはそれより 150 年後に亡びたのである。内村先生はウジヤ王は明治天皇のようであるといわれた。日本でも明治時代に非常に経済成長をした。日露戦争という大義名分にかなった戦争をし、勝って益々経済成長をしたが、やはり戦争であるので侵略戦争に変わり、遂に 40 年後に戦争に敗け、滅亡に瀕した。敗戦後平和国家として更正しようとしたが、経済成長をして、戦前に劣らない軍備を持つようになった。

これではやがてまた戦争をして、今度は亡びるであろう。あるいは経済成長のための公害の故に亡びるのが先であるかも知れない。いずれにしても経済成長が神の刑罰であることには変わりはない。

経済成長をして国民の役に立つものを多く作ってくれればまだよいが、儲かるものを作ることに専念するから、誇大広告によってよく売れるものとか、じきに壊れて早く代わりを買うようになるものを作るので物資が豊富になっても国民の利益には余りならない。浪費を奨励するので、ゴミ公害という奇妙なことさえ起こってきた。

また経済成長は国民から緑を奪う。政治家は緑のふるさと等というが、経済成長を抑えなければ緑のふるさとは護れない。経済成長もさせ、緑も護るというのは欺瞞である。物価騰貴[53]を抑えるといいつつ経済成長を計るのも欺瞞である。経済成長すれば必ず物価は上がる。一部の人は金を儲けるであろうが、一般国民は苦労する。2,700 年前にこのように現代にもあてはまる経済的洞察を述べた予言者イザヤは偉大である。なおつづく次の 8 節にも偉い言葉がある。

> また彼らの国には偶像が満ち、
> 彼らはその手のわざを拝み、
> その指で作ったものを拝む。

経済成長をすれば、偶像崇拝がさかんになるというのである。これも現代にあてはまることである。現代人は金銭という偶像を拝んでいる。金銭の奴隷になっている。奴隷ではなく、金銭がないと幸福になれないから、金銭を求めるのだといいながら、いくら得られても幸福になれず、まだ足りないまだ足りないとあくせくしている。自分で勝手に作ったものに御利益を与えよと拝むのが偶像崇拝である。金銭万能主義の現代人は典型的な偶像崇拝者である。人は神と富とに兼ね仕えることは出来ない。神を離れると偶像を拝むようになる。

（「独立時報」第 64 号、1973 年 11 月）

4-4　自由主義経済終焉の時

今日は自由主義経済終焉のときである。自由主義経済はアダム・スミスから始まった。アダム・スミスは、人間の経済活動は各人の儲けようとする心にまかせておいてよいとした。しかし、アダム・スミスは信仰を持っていたから、あとは神がよいようにして下さるのでよいと考えたのである。

この正統派の経済学に対してマルクス主義の経済学が起こり、資本主義経済は行き詰まって崩れて共産主義の社会になるといっていた。ところが資本主義社会は益々発展して行き、資本主義の発達しないロシアとか中国が共産主義国になった。これは明らかにマルクスの学説が誤っていることを示す。何故誤ったかというと、マルクスは人間の社会に宗教があることを無視したからである。いくら宗教はアヘンだといって抹殺しようとしても、宗教は現実には大きな力を人間社会に及ぼしている。それ故にマルクスのいうとおりにならないで、アダム・スミスのいうとおりになったのである。

アメリカやヨーロッパの金持ちは、儲けた金をこれは自分のものではなく神から預かったものだからとよいことに用いることを考えた。大学に寄附するとか、病院を建てるとか、福祉事業を始めるとかいうようなことに用いた。それで資本主義が益々発展して行ったのである。アメリカではよい大学は私立であって、これが金持ちの寄附で成り立っていた。

しかし近頃になってアメリカやヨーロッパの金持ちが信仰を捨てたので、今度はマルクスのいうとおりになってきた。聖書の教えに反して、他の人のことを考えないで自分さえ儲ければよいと経済活動をやって行くなら行き詰まるのは当然である。アメリカの大学でも寄附金が集まらなくなって私立大学も国費の助成が必要になってきたとのことである。

一例をあげよう。アメリカにメンソレータムという世界的に著名な家庭薬がある。この事業を始めた人[54]は信仰の人であって収入の 10 分の 1 を神に捧げますと決意して始めた。それが発展して世界の家庭薬となり大金持ちになったら、収入の 10 分の 1 で生活し 10 分の 9 を神のために使うようになった。日本の近江兄弟社[55]にも多くの寄附をしておったが、金銭で寄附するよりメンソレータムの販売権を寄附する方がよいと寄附してくれた。それでメンソレータムが日本でも発展して近江兄弟社の教育と伝道事業を大いに支えるようになった。ところがメンソレータムの社長も三代目になったら信仰等は捨ててしまって、近江兄弟社で教育、伝道等に使わないでそれだけ収入を多く本社の方によこせといってきた。初代社長との関係を述べてやっと了解して貰ったが、昨年事業部の株式会社近江兄弟社が倒産しかかったら好機到来と製造販

売権を取り上げて、大阪の薬品会社に与えてしまったのである。

昔は資本家が全部信仰を持っていて今日は全部信仰を捨てたというのではないが、大部分がこの例のようになったことは確かな事実であって、経済界が全体としてこのように動いている。アメリカの政治もこのような経済界の動きに応じて行われている。日本でも三井物産というような大会社は以前はみっともない儲けかたはしないといっていたが、今日では三井でも三菱でも儲けるために何でもするというようになってきた。経済学者までが企業は儲けるためのものであるから儲けないのは罪だという。これではマルクスの理論を待たないでも行きづまるのは当然である。インフレを抑えれば不景気になり、景気をよくすればインフレになり行き詰まってくるのである。

そうかといって共産主義でやって行けるかというとそうは行かない。共産主義社会もソ連の 50 年の実績を見ても駄目であることは明らかである。中国は他の国よりは少しはよいようであるが五十歩百歩である。これは社会制度の問題ではなく人の精神の問題であるからである。

内村先生は「代表的日本人」の中で上杉鷹山[56]のことを論じて、人間がよければこんなによく治まるのだから封建制度でもいいではないか、人を善くすることを第一に考えなければならないのだといっている。

唯物論的な経済学は根本において間違っているから無力になってしまう。「私たちは真理に逆らっては何をする力もなく、真理に従えば力がある」と聖書にあるとおり真理に逆らってはどんなに力強いと見える経済政策でも無力である。特に唯物論という哲学は人を金銭万能主義にしてしまい、金儲けのためには手段を選ばずというようにさせる。昔の幼稚な偶像崇拝にも劣る金銭という偶像を崇拝せしめるようになる。真理なる信仰をアヘンといって排撃して、愚かとしかいえない拝金宗という最も下等な偶像教を信ぜしめている。正統派の経済学もマルクス主義の経済学も等しく唯物論という誤りを犯しているから行き詰まるのは必然である。自由主義経済もマルクス主義経済もその終焉の時を迎えつつあるのである。今日の世界情勢は、神に帰らなければならないことを明示している。

(「独立時報」71 号、1977 年 1 月)

【 註・Ⅳ章 】

（1）内村鑑三の弟子、新潟県村上市出身の無教会キリスト者。船会社に勤務し外国で暮らした後、当時の東京市水道部に勤務し、後に内村の聖書集会に加わった。片耳が不自由であったため、聞こえる方の耳を内村に向け、横向きになって講義を聴いた。明治時代に東北地方で活動した吉田亀太郎牧師の四女あいと、浦和教会で吉田亀太郎牧師の司式により結婚。第二次大戦中に故郷である村上に疎開。生家は大地主だったが、戦後の農地改革ですべて失った。伝道者だったあい夫人が村上市で「無教会聖書講義所」という看板を掲げて集会を始め、これが現在の村上聖書集会となった。

（2）生産手段を持つ資本家が労働者から労働力を商品として買い、その労賃を上回る価値をもつ商品を生産することによって利潤を得る経済体制。

（3）投獄されること。牢屋に入れられること。

（4）地中海の付属海。硫化物を含むので黒く見える。

（5）ウクライナ南西部の都市。黒海第一の貿易港。2022 年 3 月 31 日、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻を契機に、日本政府はウクライナの地名の呼称をロシア語の発音に準ずる表記から、ウクライナ語の発音に基づく表記に変更すると発表した。この方針に賛同し、原文では旧表記のオデッサと記されているが、PDF 版では新表記であるオデーサに変更した。

（6）1905 年の第 1 次ロシア革命における最も重要な事件の一つ。腐った肉のスープに抗議した水兵を将校が射殺。水兵が一斉蜂起し、その将校と艦長を射殺し、ほかの将校を監禁した。艦はオデッサに入港し、ほかの戦艦などを味方につけたが、最終的に反乱は失敗に終わった。

（7）自然のままではなく、人の手が加えられ、人間の力で行われているようす。

（8）使徒言行録 5 章 38 節、39 節。

（9）言葉や文書で述べ表すこと

（10）Friedrich von Schiller（1759 ～ 1805）、ドイツの詩人、劇作家。ベートーヴェンの交響曲第 9 番の第 4 楽章の合唱の歌詞は、シラーの詩「歓喜に寄す」による。

（11）Harriet Beecher Stowe（1811 ～ 1896）、アメリカの女性作家。

（12）*Uncle Tom's Cabin* 、1852 年刊。原書では、アンクル・トムズ・ケビンと表記。以後同様。

（13）William Lloyd Garrison（1805 ～ 1879）、アメリカの奴隷解放運動の指導者。即時かつ無償での奴隷の解放を最も早い時期から主張しつづけた一人。奴隷解放運動の代表的機関紙、*The Liberator*（解放者）を発刊し、廃刊まで編集長を務めた。奴隷制攻撃のあまりの激しさのため暴徒に襲われ、殺されかけたこともある。

（14）Amy Lowell（1874 ～ 1925）のことと思われる。アメリカの女性詩人。

（15）（1892 ～ 1963）、日本の哲学者。

（16）（1834 ～ 1901）思想家・教育家。江戸幕府に用いられ、その使節に随行して 3 回欧米に渡る。明治維新後は政府に仕えず、民間で活動。1868 年、かつて自ら開いた洋学塾を慶應義塾と改名した。著「学問のすゝめ」など。

（17）幕府の臣下。

（18）禄を食むとは、俸禄（職務に対する報酬としての金銭や米）を受けること。仕官すること。

（19）民間。

（20）金銭を最上のものとして尊重する主義。

（21）（新共同訳）「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」（マタイによる福音書 6 章 24 節）

（22）給与。

（23）特に有名大学への入学がますます困難になったという意味と思われる。

（24）基督教独立学園高等学校が発行する機関誌。

（25）秋田県東部、仙北市田沢湖地区の中心地のことと思われる。

（26）栃木県日光市の足尾銅山から流出する鉱毒（鉱物を採掘・製錬する際の廃棄物などから生じる害毒）によって災害を受けた渡良瀬川下流の農民たちが、操業停止や損害賠償を求めて起こした運動。特に 1890 年代以降、大きな社会問題となった。衆議院議員田中正造はこれを積極的に支援し、天皇への直訴にまで及んだ。

（27）鉄鉱石から直接に製造された鉄。不純物が多い。

（28）溶かした金属を型に流し込んでつくった道具や器具。

（29）2.0%以下の炭素を含む強靭な鉄。鋼鉄。

（30）鉄や銅を製錬するための、回転・転倒の可能な炉。

（31）溶鉱炉。

（32）廃棄した水。

（33）骨が病変し折れやすくなる病気。全身が変形し、激しく痛む。富山県神通川流域に多発し、1968 年に鉱山廃水中のカドミウムによる公害病と認定された。

（34）benzene　hexachloride、有機塩素系の殺虫剤の一種。現在、日本では環境汚染防止のため使用禁止。

（35）ひろがりはびこること。気分や風潮などが一面にみなぎること。

（36）現在では、二酸化炭素やメタンなどの温室効果ガスの急激な増加が、地球的な気温の上昇とそれに伴うさまざまな環境問題を引き起こすと指摘されている。この気温上昇の原理は 19 世紀末には指摘されていたが、広く国際的に認識されるようになったのは 1970 年代以降、全地球的な温度上昇傾向が観測されて以降のようである。「気候変動に関する政府間パネル」（IPCC）によって、地球温暖化の科学的知見・影響予測・対応策の検討がなされたのは 1988 年 11 月である。鈴木が本稿を語った 1970 年には、現在のような地球温暖化の理論は広く知られてはいなかったと思われる。

（37）自動車の排気ガスなどに含まれる炭化水素や窒素化合物が太陽の紫外線を受けて発生する煙霧。目や呼吸器に障害をもたらす。

（38）カメ・ワニ・トカゲ・ヘビなどの類。ほとんどが陸生の変温動物で、肺呼吸を行う。ここでは恐竜のこと。

（39）1980 年、ある地層にイリジウムが集中的に堆積している理由は、直径 10km ほどの隕石（小

惑星）が地球にぶつかったからだとの研究が発表された。それ以後、白亜紀末の恐竜大絶滅の原因は隕石衝突だという説が主流になっていった。

（40）事物や現象を成り立たせている根本の法則。また、認識や思想の根本となる理論。

（41）世の中のありさま。

（42）（新共同訳）「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか。」（マタイによる福音書 16 章 26 節）

（43）Max Weber（1864 ～ 1920）、ドイツの社会学者・経済学者。

（44）二宮尊徳（1787 ～ 1856）、江戸末期の熱心で研究的な農業者（篤農家）。金次郎は通称。

（45）南アフリカ共和国。

（46）Michelangelo、本名 Michelagniolo　Buonarroti （1475 ～ 1564）、イタリア、ルネサンス期の彫刻家・画家・建築家。ルネサンスの大画家、古代ギリシア以来の最大の彫刻家として知られ、レオナルド＝ダ＝ビンチと並ぶルネサンスの巨匠。死後には詩集も出版された。

（47）ローマ教皇が統治するローマ市内にある小独立国。ヴァチカン市国。

（48）ローマ教皇庁にある礼拝堂。1473 年～ 1480 年にシクストゥス 4 世が創建。ミケランジェロの天井画（天地創造など）、壁画（最後の審判）で著名。

（49）中に綿を入れた防寒用の衣服。

（50）統一王国を築いたダビデの死後、イスラエルは北のイスラエル王国と南のユダ王国に分裂した。ここでのユダ国・ユダとは、ユダ王国のことと思われる。なお、北イスラエルは紀元前 701 年、南ユダ王国は紀元 587 年に滅亡した。

（51）イスラエルの最盛期を作ったイスラエルの王。在位は前 1010 頃～前 970 頃。初代の王サウルの後を受け、近隣諸国を征服・併合。エルサレムを攻略して都とし、イスラエルを統一した。

（52）1954 年に防衛庁（現防衛省）が設置され、陸海空の 3 自衛隊が発足した。1957 年 5 月に決定された「国防の基本方針」に基づき、1958 年度から第 1 次 3 ヵ年計画（1 次防）が実施された。2 次防は 1962 年度～ 66 年度の 5 ヵ年計画、3 次防は 1967 年度～ 1971 年度、4 次防は 1972 年度～ 1976 年度であった。3 年～ 5 年の年限を区切っての防衛力整備計画はこの 4 次防で終わり、1977 年度以降は前年 10 月に国防会議および閣議で決定された「防衛計画の大綱」に沿って進められることになった。

（53）物価が高くなること。相場が上がること。

（54）Albert Alexander Hyde（1848 ～ 1935）、メンソレータムの発明者であり創業者。「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい」（マタイによる福音書 6 章 33 節）という聖句を自身の生活の中心とし、所有物はすべて神から預けられているものという信仰に生きた。「人の生涯の美しさは彼の富から生ずるのではなく、彼の奉仕から生じるのである」と語り、外国伝道を支援する有力者として知られた。16 歳の時に移住したカンザス州の町で後に生まれたヴォーリズと 1910 年に知り合いとなった以降、ハイドは日本で伝道活動を行うヴォーリズを気にかけ、支援した。そして、お金を寄付するよりも販売権を寄贈すればより長くヴォーリズの伝道と事業を支えられると考え、日本でのメンソレータムの販売権をヴォーリズが創立した近江兄弟社（近江ミッション）に譲渡したようだ。（本註は『ヴォーリズ評伝』（奥村直彦著）を参考に作成した。ヴォー

リス、ハイド、近江兄弟社について、詳しくは同書を参照されたい。）

（55）滋賀県近江八幡市に本社をおく、医薬品の製造販売会社。後述の通り、創立当時の名称は近江キリスト教伝道団（近江ミッション）で、後に近江兄弟社と改称。創立者はアメリカ人のヴォーリズ（William Merrell Vories、1880 ～ 1964）。来日当初のヴォーリズは、教育活動・建築設計業などをしながらキリスト教を伝道した。1910 年、教え子の村田幸一郎、吉田悦蔵とヴォーリズの 3 人が中心となり、近江キリスト教伝道団（近江ミッション）を結成。1913 年、アメリカでハイドと再会し、メンソレータム社の日本代理店となった。1918 年、近江療養園（結核療養所）を開設。1920 年、メンソレータム（皮膚疾患の家庭用治療薬の商標名）の輸入販売を開始。1931 年、工場を建設し、メンソレータムの製造を開始。1934 年、近江ミッションを近江兄弟社と改称。戦時体制となった 1942 年には、伝道活動を八幡基督教会に移譲し、近江兄弟社は医療、教育、社会事業など、直接キリスト教に関わらない部門を受け持つようにした。1944 年、株式会社近江兄弟社となり、村田幸一郎が社長を務めた。ヴォーリズ、近江兄弟社と鈴木との関係性については本書 6-2、8-1-3 を参照のこと。ヴォーリズ個人については 6 章のヴォーリズの註を参照されたい。

（56）（1751 ～ 1822）、江戸後期の米沢（現山形県米沢市）藩主。藩校の設立、倹約の励行、行政の刷新、産業の奨励、荒地開墾など、あらゆる面で藩の立て直しを行った名君として知られる。内村鑑三の『代表的日本人』に記された一人。（他は、西郷隆盛、二宮尊徳、中江藤樹、日蓮の四名。）「なせばなるなさねばならぬ何事もならぬは人のなさぬなりけり」の作者としても有名。